

えっ！ケリが絶滅？ ～農業との密接な関わり～

脇坂英弥・脇坂啓子（関西ケリ研究会）

はじめに

チドリ科の鳥であるケリ *Vanellus cinereus* は、国内では水田や畑地に営巣することがほとんどである。そのため、農業活動にともなう人為攪乱（耕起や湛水など）により、本種の繁殖が中断させられることが知られている（脇坂ら 2021）。我々の調査地において、その影響が顕著に現れた 2024 年は、一区画 51 巣のうち自然孵化できた巣は、わずか 1 巣であった。

ドイツでは、ケリと同属のタゲリ *Vanellus vanellus* の個体数の減少が著しく（Kamp et al. 2021）、その原因は農業の集約化と捕食の増加によることが示されており（Plard et al. 2019）、現在対策に力が注がれている（Buschmann et al. 2023）。ケリにおいても、今後、2024 年のような著しい繁殖成績の低下が続くと、繁殖個体群の維持が困難なる可能性も懸念されるため、ここに報告するとともに打開策を検討したい。

攪乱の影響

京都府南部に位置する巨椋池干拓地の一区画（約 70ha）において、2009 年と 2024 年のケリの抱卵巣数に占める孵化に至った巣の割合（孵化成功率）を比較した。すると、15 年間でペア数は 44%減少、抱卵数は 26%減少していることが認められ、孵化成功率も 44%から 14%に低下したことが明らかとなった。また、2024 年に確認した 51 巣の孵化の成否と人為的な影響を調査したところ（図）、自然孵化がわずか 2%（1 巣）で、人為保護によりかろうじて 12%（6 巣）孵化できたことが確認された。これは 2024 年の攪乱の影響が非常に強かったことを示している。

人為攪乱の割合が高かった理由として、①暖冬の影響で早春期から農地の雑草が伸びたため、耕起が高頻度で実施されたこと、②水田から畑地に転換する農地が増加したことで、耕起の時期が従来とはずれたことが挙げられる。つまり、ケリの繁殖の成否には、暖冬の影響および農業形態の変化の影響を受けている可能性があることを示唆している。

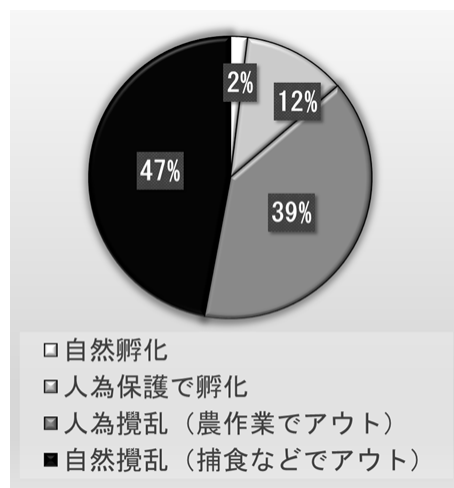


図) 2024 年 巣孵化の成否要因

GPS 追跡

抱卵に失敗したケリの雌の動きを GPS タグの追跡から調査した。その結果、成鳥は失敗後も巣場所から 200m 以内の範囲内に滞在して再営巣を試みたのに対し、1 歳若鳥は巣場所から 3～5km 離れた農地へ移動し、元の巣に戻ってくることはなかった。これは巣場所から、若い個体は去る、年寄りには居残るという傾向があることを示している。若い個体が孵化に成功しないと、本種にも高齢化社会をまねく危険が潜んでいるのかもしれない。

関西ケリマップ

当日は、来場者の皆様からケリの分布情報をご教示いただき、「関西ケリマップ」を作製することができた。貴重な情報を提供してくださった方々に心より感謝する。なお、関西ケリマップの整理ができ次第、改めて報告する予定である。